教育実践報告

小学校英語における児童の発音練習に有効な教材の開発

常名　剛司、和田　将延、亘理　陽一
（静岡大学教育学部附属浜松小学校・静岡大学教育学部附属浜松小学校・中京大学）

Developing Effective Teaching Materials with a Tool for Pronunciation Practice in Elementary School

JONA Tsuyoshi，WADA Masanobu & WATARI Yoichi

要旨

現行の学習指導要領においては、まずは聞くこと・話すことを中心に英語の４技能に慣れ親しんだり、習熟したりすることを主な目標としている。英語の発話の技能の中では、流暢性を重視するあまり、より正確な発音で話すことができることまではねらってはいない。本論では、今後、より重視されると考えられる発音指導に適した教材冊子の開発と、それらを用いた実践について報告する。教材作成の過程と工夫、発音指導における「リズム」「イントネーション」「連結・脱落・同化」「センス・グループとポーズ」の４つの発音ポイントごとに作成した教材を使用した実践を紹介する。児童の振り返りの記述から、本教材を活用した小学校英語における発音指導の可能性と今後の課題について考察する。

キーワード：　発音、音声指導、教材開発

１．はじめに

現行の公立小学校に用意された授業時数（３・４年生で 35 単位時間、５・６年生で 70 単位時間）をどのように捉えるかは、学校での外国語教育の目的・目標をどう考えるかによって変わってくる。英語が日常的に使用されている場所で英語を用いて不自由なく意思疎通ができるようになることが目標なら確かにとても十分とは言えないが、英語の音声・発音に「慣れ親しむ」程度で終えてしまうなら、他教科の時間を奪ってまですべきことかと批判されても仕方がない。

他方、児童が母語と外国語の音声的な特徴の違いに対して大人よりも敏感だからと言って、「習うより慣れろ」の授業で慣れ親しむ以上のことを達成するのは難しいだろう。報告される小学校の英語授業の現状（大津・亘理(編)，2021）、特に発音に関しては、慣れながら筋良く習い、習って上手く慣れることを可能にする教育内容・教材が必要である。

本論では、外国語として英語を学ぶ目的が、単に英語を使えるようになるということだけにあるとは考えない。外国語という「窓」を手に入れることで、(ａ)自らの母語について改めて考え直してみたり、他の外国語と比較したりすることができ、(ｂ)英語と母語を通じて他者との関わり方を学ぶことができ、(ｃ)他者とのコミュニケーションを通じて、英語を話す自分と向き合い、母語を話す自分と向き合い、自分をより深く知ることができる（亘理，2019）。例えば聞くこと・話すことの指導を通じて児童は、先生やクラスメートが話す英語を理解するために、相手が英語を話す時、どういう音が聞こえてくるかを学ぶ。しかし現状の発音指導において、聞く・話すという行為が十分に意識されているかは疑わしい。上記の目的に照らせば、英語を話す時、自分がどういう声を出しているかや、どういう声を出せばどういう風に相手に伝わるのかを自分の五感で感じて考えながら、自分と相手をつなぐ言葉について学び、自分の言葉を豊かにしていくような発音指導が求められる。翻って、本論における発音指導の実践的探究は、児童たちが英語と自分の関わりをどう捉えているか､英語で何ができるようになりたい、あるいは英語の何を知りたいと思っているか、そして外国語（英語）を通じて何を学びたいと思っているかの再検討にもつながるものと考える。

作成した教材冊子は、発音練習教具である mimi’x（鈴木楽器製作所）を用いた発音練習の活動と、それと組み合わせて単語や英文を書く活動のワークシート（図５）で構成されている。授業で適宜活用できるよう、小学校５・６年生の外国語科検定教科書 NEW HORIZON Elementary English Course の各 Unit の構成・内容に対応させ、コピーを児童にそのまま配布して授業内外で使用することができるようにした。

英語らしく聞こえ、英語として伝わる発音を児童が身につけるためにワークシートで取り上げた発音のポイント（教育内容）は、東後（1978）および靜（2019）に依拠し、（１）ゆっくり（強く）発音される語・音節とすばやく（弱く）発音される語・音節があること（リズム）、（２）声の上げ下げで発言の意図を伝えること（イントネーション）、（３）すばやく、なめらかに発音す

るために音が変わること（連結・同化・脱落）、（4）意味のまとまりで区切ること（センス・グループとポーズ）の４つ、および、一つひとつの音素にこだわりすぎないことである。４つのポイント（図６）の順序はそのまま、我々が考える、小学校英語での発音指導における重要性を反映している。

次節では教材作成の過程と、小学校の実態に合わせた工夫を述べる。３節では、４つの発音ポイントに沿って実践例を報告する。第４節では、児童の感想を取り上げ、現時点での成果と課題を述べる。

２．教材作成の過程と工夫

本教材冊子は、筆者を含むプロジェクトメンバーによる月に１回程度のオンライン編集会議を通じて、以下の順序で作成された。

まず発音練習する語彙や表現を教科書の内容と関連して学べるように、各 Unit に A4 サイズ１枚に練習内容をまとめた。授業の中で活用しやすいように教科書の学習内容と関連させることで、児童が、学ぶ必然性を感じながら、英語の発音と授業で取り扱っている学習内容について同時に学び深めることができると考えた。次に、5・6 年生の教科書の各 Unit のワークシートがほぼできたところで、英語の発音を学ぶ意義や前節で示した発音のポイントをまとめ、各 Unit のワークシートが４つの発音ポイントのどれに当たるのかを分類し、表に整理した。そして、５・６年生の２年間で発音の４つのポイントの全てを網羅できるように意識して問題を作り直したり、新規に問題を作成したりした。初めから４つの発音のポイントに沿って各 Unit のワークシートを作成する形もあり得たが、児童の学びやすさを優先して語彙や表現を選択したため、この順序での作成となった。教科書の学習内容を取り入れて作成するため、教科書会社やコンテンツの保有元に著作権を確認し、内容上必要と判断し、許諾を得られたものを冊子に含めた。最後に、児童が楽しく学べるように、フォントや細かい文言の修正をしたり、オリジナルの挿絵を入れたりして教材冊子全体のデザインを整えた。

教材冊子は、児童の学びやすさを考えて、以下の点に留意して作成されている。１つ目は、発音練習の問題を教科書の学習内容から作成するということである。本教材冊子は、各 Unit の学習終了前後に１枚につき 10 分程度で取り組むことを想定し、児童がこれから授業で学ぶ、あるいは授業で学んだ語彙や表現を発音練習問題として取り上げている。教科書の Unit に登場する語彙や表現を取り上げることは、学習内容の定着を促すだけでなく、新しい語彙や表現を取り上げるよりも認知的負荷が低く、教師・児童にとって負担感の少ない、無理なく取り組める教材をもたらすと考えた。２つ目は、発音における大切なポイントを可視化することである。音声は目には見えない。音声を与えるだけでは、児童にとって発音のポイントを捉え意識的に練習することは難しい。そこで、発音の強弱や連結する箇所を●や□で表すことで、ポイントを可視化すると同時に、意識して発音すべき場所が明瞭になるようにした。また、実際に現場で英語を指導している教師の中には、英語に対する苦手意識をもっている人も少なくない。そこで、特に発音が難しいと思われる一部の問題については、タブレット端末等のカメラ機能で QR コードを読み取ることで、モデル音声を再生して使用できるようにした。そうすることで、教師にとって指導のハードルを下げることにつながるだけでなく、児童が何度も自分で聞き返すことができるようになり、仮に音声を提供してくれる教師が側にいない場合でも、それぞれに合ったペースで発音を学べる環境を保証することにもつながると考えた。３つ目に、小学校高学年では、音声で十分に慣れ親しんだ語彙や表現については、読む・書くについても指導する必要がある。教材冊子には、発音を意識しながら文字を書く練習ができるようにすることで、児童が音声と文字を結びつけて４技能を統合的に学べるようなワークシートも収録した。

作成を通じて明らかとなった発音教材作成の難しさとして、次の４点が挙げられる。まず苦労したのは、(ａ)教科書のどの部分を取り上げるのかという点である。単語レベルにおける発音の練習、教科書のモデル文における発音の練習、児童それぞれの伝えたいことを伝える文における発音の練習など、mimi’x は様々な場面において活用が可能となる。その中で、英語のリズムと音について練習するには教科書のどの部分を取り上げることが効果的かを検討することが求められた。この点に付随して、(ｂ)どの単語を取り上げるのかということも考える必要があった。その時には、英語のリズムや音を感じることができるのはどのような単語なのか、どのような順番で練習していくのがよいかという視点で、単語の選択を行った。３点目に、(ｃ)作成したワークシートを４つの発音ポイント（リズム／イントネーション／連結・同化・脱落／センス・グループとポーズ）に分類することである。上記の作成順序の通り、mimi’x をどのような場面で教材化できるかという視点でワークシートの作成に着手し、作成が進んできてから分類を行ったため、いくつかの発音ポイントにまたがっているワークシートもあり、教育内容の絞りこみに難しさが生じた。４点目は、(ｄ)どのようにして繰り返し学習できるようにするのかである。発音は教材を一通り体験するだけでできるようになるものではない。一方で、無闇に同じことを練習し続けても、活動をマンネリ化させたり、雑に発音してしまったりすることにつながり、ただの作業となってしまう。そのため、ねらいを変えることで単語や文を繰り返し発

音するようにしていったり、活動後にチェックマークを入れられるようにしたりすることで、達成感を味わいながら少しずつ進めていけるよう、また、宿題のように児童一人で進められるよう工夫を図った。

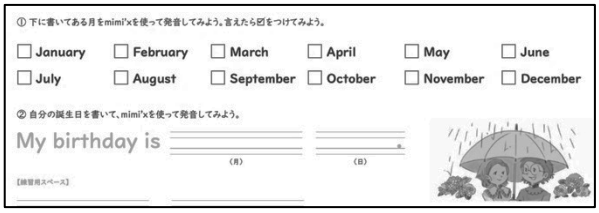
３．実践例

開発した教材冊子と mimi'x を使った実践は、国立大学附属小学校５年生（70 名）、６年生（69 名）を対象として 2022 年５～12 月に行った。５年生を対象とした実践は、第２筆者とアメリカ出身の ALT が行い、６年生を対象とした実践は、第１筆者とアメリカ出身の ALT が行った。発音ポイントごとに分かれたワークシートを使用した実践は、各単元の学習終了後の外国語科の授業中に行った。

３．１．リズム

５年生の児童を対象として、Unit 2 の学習終了後にリズムを学ぶワークシート（図１）の実践をした。授業で月の名前について少し練習した後に、ワークシートを活用した（図１）。まず始めに、月の名前を発音した後、自分で意識して強く言っている部分について英単語の上に〇を書かせた。書いている中で、児童は自分の発音に目を向ける様子が見られた。児童は、「これってどこを強く言うんだったっけ」と、今まで言えていたという気になっていたが、実はさらにリズムに意識する必要があることに気付いたり、「January、February、March、April、May と始めの方は最初を強く言っているけど、その後のところでは強く言う位置が変わってきている」と単語によって強く言う部分が異なることに改めて気付いたりしていた。〇を書くときには何度も発音し、自分の発音を注意深く聞いている様子も見られた。ただ単に発音練習するだけでなく、自分の発音をチェックする手段として mimi'x やこのワークシートを活用していた。自分で強く発音する部分に印を付けた後、ALT の発音を聞き、修正し、それをもとに発音の練習を行った。〇の印を付けることでより強く言う部分を意識し、発音練習をすることができているようだった。

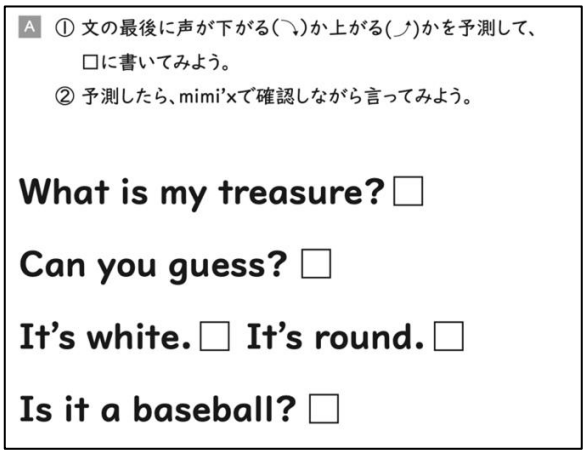
図1 リズムのワークシート



３．２．イントネーション

6年生の児童を対象に、2学期終了後に Unit 2 の復習として発音のイントネーションを学ぶワークシート（図2）の実践をした。授業では、まず本単元の学習の復習として、教科書で取り上げられているチャンツでスピーキングの練習をした。その後に、発音のイントネーションを学ぶワークシートを使用した。初めに、発話する時に、文末が上昇調になるか、下降調になるかを予測して、ワークシートに矢印を書かせた。その後、mimi'xを使って発話をさせた。児童のワークシートには、疑問詞から始まる文も上向きの矢印が書かれたものが多く見られた。疑問形の文は全て文末を上昇調で発音するという認識の児童が多数いることが分かった。また、普段はあまり文末のイントネーションを意識していなくて、このワークシートであらためて視覚的、体験的に意識している様子が観察された。その後、モデル音声として ALT が強弱をつけて例文を発話した。ALT が例文を発音する音声を聞いて、児童は正しいイントネーションで例文の発音練習をした。ワークシートの例文の最後の□の中に、音の強弱を表す矢印を書かせて視覚化させたことで、イントネーションについて自覚的に練習できるようになっていったと考えられる。しかし、ALT の発音を聞いても、それが上昇調なのか、下降調なのかが正確には分からない様子の児童も見られた。

図2 イントネーションのワークシート

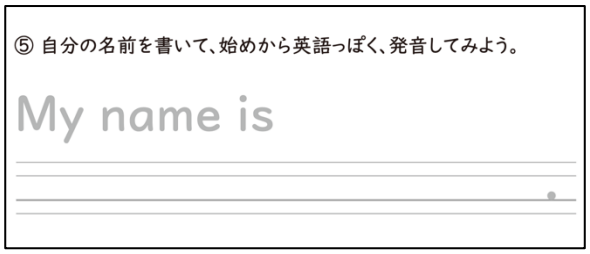


３．３．連結・同化・脱落

５年生の児童を対象として、Unit 1 の学習終了後に連結・同化・脱落を学ぶワークシート（図３）の実践をした。単語の発音練習だけでなく、文の発音練習を入れることで、英語らしさを感じることができるようになると考えた。まず、教科書に書いてある登場人物の名前を mimi'x で発音した後、その名前を書く活動を行なった。そして、発音練習の際には、児童に発音のポイントを的確に掴ませようとして、「英語っぽく話す」ために必要なことを考えさせた（図３）。児童は、リズムよくつなげて言うことや強弱を付けることが大切であると確認した。その上で 'My name is ….' を ALT に発音してもらい、どう発音するとよいか考

えさせた。児童は、「単語１つひとつを切るのではなく、つながる部分がある」（ママ）と気付いていた。今回の練習した文の中では ‘name is’ の部分をつなげることで英語っぽくなることを意識して、自分の名前で練習した。

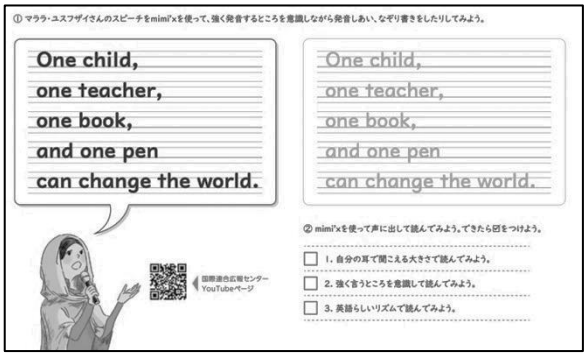
図3　連結・同化・脱落のワークシート



３．４．センス・グループとポーズ

６年生の児童を対象として、Unit 2 の学習終了後に、センス・グループとポーズを学ぶワークシート（図４）の実践をした。単元の最後に、児童の視野を広げるために設定された学習内容を学んだ後に、復習と発音の練習を兼ねて取り組んだ。本ワークシートの主な問題は、東京書籍 NEW HORIZON Elementary English Course 6 の教科書の Unit 2 に掲載されているノーベル平和賞の受賞者であるパキスタンのマララ・ユスフザイさんの ‘One Child, one teacher, one book, and one pen can change the world.’というメッセージである（図４）。教科書では、言葉のまとまりごとに区切って読むことを意識させた。ALT の発話に続いて児童にも mimi’x を使って発話させた。児童は区切って読んでいる時には、体全体でリズムをとりながらポーズを意識していた。区切って読むことで、聞き手に対して意味のまとまりを示すことができる。こうして常に聞き手を意識して発話することの大切さに気づかせたいと考えた。また発話者の意図によって ‘one’ を強く発話するのか、 ‘child’ や ‘teacher’ を強く発話するのかは異なる。強調して言いたいことが相手に伝わるように、強く発話するところを意識させて練習するように促した。授業では、ALT が強調の仕方を変えながら、文を読み、その後に続いて児童たちに発話させた。

図4　センス・グループとポーズのワークシート



児童たちは、ある子は ‘one’ を強調させて、ある子は ‘child’ や ‘teacher’ を強調させて発話していた。その後に、その文のなぞり書きをさせた。

４．まとめ

発音の4つのポイントに関するワークシートで発音練習をした後に、本教材を使って発音練習をした感想をワークシートに記述してもらった。児童7名の振り返りの記述を以下に掲載する。

表1　児童の振り返りの記述

発音ポイント	児童の振り返りの記述
リズム	・月を表す表現の強く言うところを意識して言うと、少し発音がきれいに聞こえると気づいた。 ・どこを強く言うのか、弱く言うのかの強弱の付け方が変わったり、自分の発音の違うところが分かったりしてよいと思う。
イントネーション	・Can の最後に音がこもって上手く喋ることができなかったので、できるだけ澄んだ声で喋ろうと思う。 ・下がる音の時に発音が雑になってしまう。下がる音よりも上がる音の方がやりやすいと分かった。
連結・同化・脱落	・英語っぽく発音するには流れるように話したり、アクセントに気をつけて話したりすることが大切だと気づいた。またどうしたら英語っぽく発音できるかよく分かった。
センス・グループとポーズ	・mimi’x とワークシートを使うことで発音の仕方や強く言う場所が明確に分かった。また、言うだけでなく、書くことで理解が深まった。 ・読む、書く、聞くの三重で習得しやすいため、よいと思う。

児童の振り返りの記述（表１）では、発音のポイントや mimi’x とワークシートを一体的に活用して学習するよさが書かれたものが多かった。記述文を見ると、児童が音の強弱や上げ下げを強く意識していたことが分かる。音の微妙な違いに気付いたことで、「発音が雑になって」などと、音の質にまで意識が向いた記述が見られた。また、「書くことで理解が深まった」という記述から、この教材で英語の４技能を一体的に育むことができる可能性が示唆されている。

センス・グループとポーズの感想の中に、1 人だけ「英語が読めない」とネガティブな感想を書いた児童がいた。発音を可視化して練習するワークシートは、

読む要素も含まれている。しかし、音声に慣れ親しんでいる語彙や表現であっても、児童がすぐに読むことができるという前提で学習を進めるのは疑問がある。児童が英語を読んで発音できるようになるためには、モデルとなる音声を児童が意識的に聞くよう促し、繰り返し練習できる環境を用意することが大切であろう。

最後に、今回の教材冊子の開発・実践における成果と課題を述べる。児童の発音を向上する教具であるmimi'xを使用することで、自分が発話した細かな音まで聞き取りやすくなる。さらに今回は児童の発音の向上をねらって教材冊子を作成したが、開発における手応えとしては、教科書内容のモデル音声を聴きながら、再度、ワークシートを使って読んだり、書いたりすることで、児童が自分の発話に意識を向けている姿が見られたことである。本教材で発音のポイントを視覚化することによって、音声だけでなく、視覚も頼りに発音を意識することができるようになったため、児童にとって英語の発音を学びやすくなったと言えるだろう。本教材を使用して、ワークシートの英文に印をつけたり、英文の文字をなぞって書いたりして英語を技能統合的に学ぶことで、児童が音と文字を繋げて認識する経験ができると考えられる。

本実践報告では、教材の開発段階での中間まとめとしての性格上、実践例とそれに関する児童の振り返りの記述などのデータが少なく、開発した教材の有効性を客観的に検証するまでには至っていない。今後は完成した発音教材を使用して実践を積み重ね、その効果を検証する必要があると考える。

また、データによる頒布には著作権上の問題があり、作成にかかる時間を短縮するためもあって、今回は紙ベースでの教材冊子のみを作成した。可能ならばデジタル教材として端末上で使用できるようにすることで、GIGAスクール構想の一人一台端末に合わせた児童の多様な学び方が期待できる。

本報告における教材冊子によって、今後の小学校英語においてますます課題となる発音指導に道筋のついた提案ができたと考える。実践と改善のサイクルを通じた継続的な評価研究が望まれる。

【引用文献】

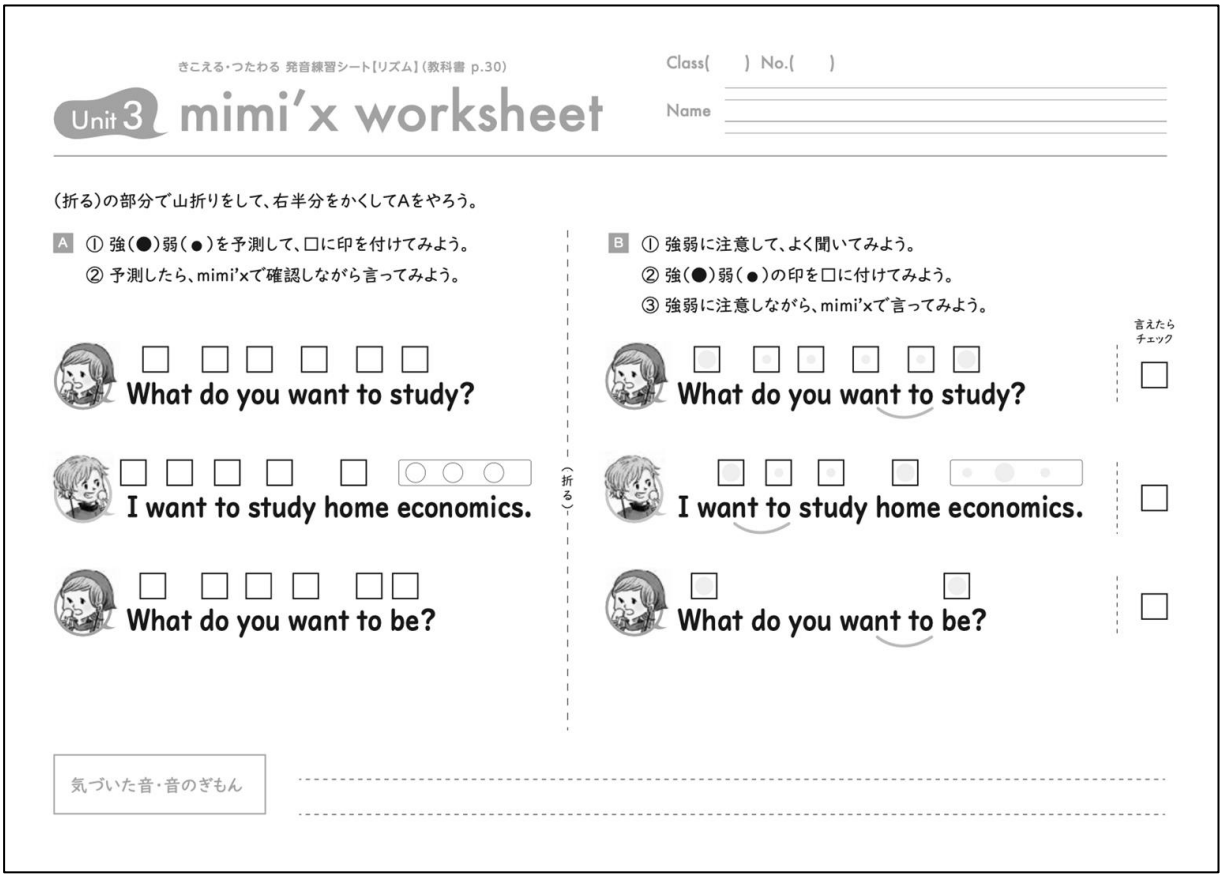
大津由紀雄・亘理陽一（編）（2021）.『どうする、小学校英語？：狂騒曲のあとさき』東京：慶應義塾大学出版会.

静哲人（2020）.『日本語ネイティブが苦手な英語の音とリズムの聞き方がいちばんよくわかる リスニングの教科書』東京：テイエス企画.

東後勝明（1978）.『英会話のリズムとイントネーション』東京：金星堂.

亘理陽一（2019）.「対話実践的に英語を学ぶ」『教育』878, 2-10. 東京：教育科学研究会.

図５　小学校５年生用の発音練習ワークシート


きこえる・つたわる 発音練習シート[リズム]（教科書 p.30）

Unit 3 mimi'x worksheet

Class(　) No.(　)

Name

（折る）の部分で山折りをして、右半分をかくしてAをやろう。

A ① 強（●）弱（●）を予測して、□に印を付けてみよう。
② 予測したら、mimi'xで確認しながら言ってみよう。

What do you want to study?

I want to study home economics.

What do you want to be?

（折る）

B ① 強弱に注意して、よく聞いてみよう。
② 強（●）弱（●）の印を□に付けてみよう。
③ 強弱に注意しながら、mimi'xで言ってみよう。

言えたらチェック

What do you want to study?

I want to study home economics.

What do you want to be?

気づいた音・音のぎもん

図６　小学校６年生用の発音練習ワークシート

Unit 8 mimi'x worksheet

Class(　　) No.(　　)

Name

① mimi'xを使いながら、発音し、強く言うところに黒丸をつけてみよう。

I want to join the volleyball team.

I want to enjoy sports day.

I'm good at running.

I want to be a volleyball player.

② 将来の夢を紹介する文を書いてみよう。
また強く言う部分を赤色で印をつけよう。

I want to

I want to

I'm good at

I want to be a

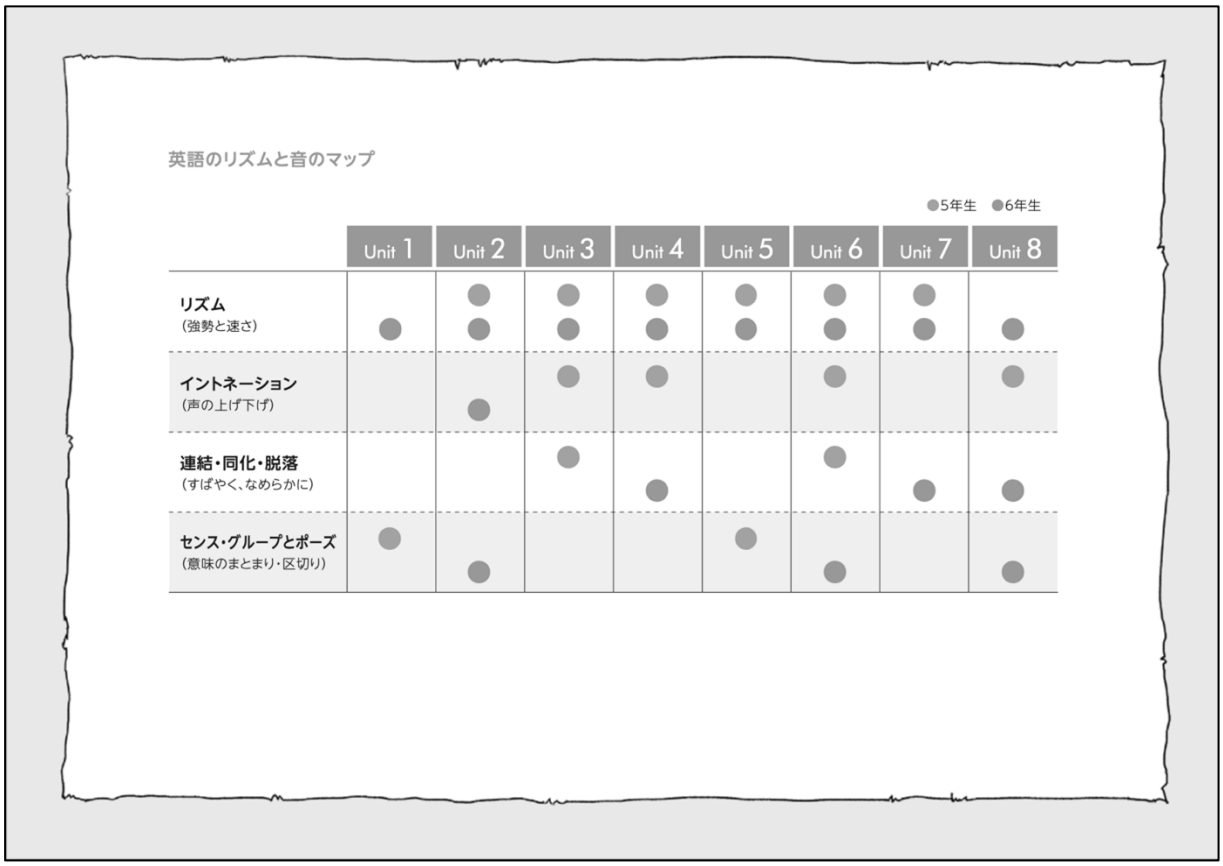
③ mimi'xを使って声に出して読んでみよう。できたら☑をつけよう。

☐ 1. 自分の耳で聞こえる大きさで読んでみよう。

☐ 2. 強く言うところを意識して読んでみよう。

☐ 3. 英語らしいリズムで読んでみよう。

図７　発音の４つのポイントの配当表



英語のリズムと音のマップ

●5年生　●6年生

	Unit 1	Unit 2	Unit 3	Unit 4	Unit 5	Unit 6	Unit 7	Unit 8
リズム（強勢と速さ）	●	●●	●●	●●	●●	●●	●●	●
イントネーション（声の上げ下げ）		●	●	●		●		●
連結・同化・脱落（すばやく、なめらかに）			●	●		●	●	●
センス・グループとポーズ（意味のまとまり・区切り）	●	●			●	●		●